

大丈夫。クリルタイの攻略本だよ。

奇刊 クリルタイ 7.0

High-end Magazine
for
Multi Cultural Personality

豪華インタビュー四本!

白河桃子

ステファン・ラピー

望月倫彦 (文学フリマ代表)

長谷川剛

(オタク婚活・恋活サービス「アエルラ」代表)

あなたはどこにする?
各サービスに
潜入レポート!
婚活会社レビュー

最適なサービスが
きっと見つかる!

婚活サービス、傾向と対策

唯一の婚活解析書

“この書を読めばすべてが視える”

数多の謎が解き明かされる

婚活アルティマニア

ロールキャベツ男子、歩くATMってなんだ?恋愛パスワード時代

F0、カブ目、エスポワール号ってなに?
もう婚活初心者とは呼ばせない!

婚活Wikipedia

アルファブロガー松永英明さんが語る「少子化は必然」?

矛盾の子育て

だめんずうおーがーなあなたへ
これがゼロ年代の処方箋!

なぜだめんずは
似たタイプの男に惹かれ続けるのが

好評連載陣!



はじめに

ご注意

本ファイルは『奇刊クリルタイ 7. 0』のおためし版PDF ファイルです。本誌の内容から一部を抜粋してご提供しております。よろしければ是非ご覧いただき、感想などtwitterなどでいただければ幸いです。

本誌の完成版は11月18日の「第15回文学フリマ」もしくは委託先にて頒布いたします。こちらに合わせてご覧ください。

【頒布情報】

奇刊クリルタイ7.0

B5版、116ページ（予定）1部1,000円

第15回文学フリマ

Fホール エ - 40（東京流通センター2F）

【イベント詳細】

開催日：2012年11月18日（日）

開催時間：11:00～17:00

会場：東京流通センター 第二展示場（E・Fホール）

アクセス 東京モノレール「流通センター駅」徒歩1分

一般参加方法：入場無料・どなたでもご来場いただけます

（サークルカタログ無料配布、なくなり次第終了）

奇刊クリルタイ
republic1963

目の前では不思議な光景が繰り広げられていた。

岐阜市郊外の一軒家。ゲーム機とテレビが置かれた居間らしき部屋で、私は母親と祖母と見知らぬ中年の女性といた。仕事の都合で、10年住んだ東京から岐阜に戻ってきたばかりの頃である。母親と祖母に「いくところがある」と言われて連れられたのがこの民家。そこでは「人の前世が見える」という霊媒師に我々一家の行く末について真剣に相談している母親がいた。そして、何を思ったか「先生、息子は結婚できますでしょうか！」と霊媒師に相談する母親。私が死にたくなかったのは言うまでもない。だが、その霊媒師の「ご高説」がふるっていた。「結婚できるだろうけどそのための出会いの場所にいかないとできない」という大変素晴らしいお答え。「アホか！」私は心の中で絶叫した。その後、内弁慶を炸裂させた事は別の話。だが、ひとしきり内弁慶を炸裂させると、私は恐ろしい事に気がついた。それは、「親世代からみたら私はもう結婚していないとおかしい年頃なのだ」というあまりにも当然の事実だった。だが、東京ではそんなプレッシャーにさらされた事はなく、当然、いつかそのうち結婚できるだろうという程度に考えていた。ブロガーという立場上『「婚活」時代』（2008年 ディスカヴァー・トゥエンティワン）なども読んでいたが、正直、それが自分に直接関係があること、もっといえば自分が「ヤバいかもしれない」なんていう事、考えたことがなかったのだ。その日までは。

だが、婚活しようとして途方にくれた。婚活しようにも、何のあてもないからだ。もっとも、10年ブランクがあれば当たり前なのだが。手始めにヤフーパートナーズとマッチドットコムに登録してみた。私が最初にメールしたのは業者のアカウントだった。3通目で別サイトに誘導されたためそのまま終了。業者に自分からメールしたなんて自爆もいいとこだ。そもそも、マッチドットコムには岐阜のアカウントがあまりいない。岐阜から名古屋、三重あたりまで範囲を広げてしらみつぶしにメールを送る。そして音速の勢いで送りつけられるお祈りメール。毎日一通は必ずメールすると決めてメールを送り続けた。だがそれでも返事が来るのは一週間に1件あればいい方だった。やりとりがまともに続くのはもっと確率が低い。実際に会って話がはずむなんていうのは本当に奇跡みたいな確率だった。一方、伝統的な手法も試してみた。場末のキャバレー（非キャバクラ）で「キャバレーのママの友達」という女子数人と冷凍から揚げと焼きそば片手に合コンしたり、後になって、女性陣から割り勘はあり得ないとか難癖付けられたり、YAHOO!パートナーに登録したら高校の時の同級生に遭遇したり、お見合いパーティで瞬殺されて帰ってきたりもした。それで思ったのが、お互い30過ぎにもなるとそれなりにシビアに相手の事を見ているという当たりの事実。金はあるのかDVはないのか、変な趣味はもってないのか（これには多分当てはまる）等々。仕方がないけれど、けれど、こっちだって選ぶ権利があるとは声を大にして言いたかった。こっちだって色んなものに目をつぶってんだよ！と。

考えてみれば、不思議な事だった。私たちはそもそも、心のきれいな男女が恋愛して、結びつくのが結婚だと信じていた。古今東西の昔話や童話の類いを見るまでもなく、打算によって結婚相手を選ぶな、と繰り返し教えられてきたはずだ。だが、昔話や童話はめったに起こることがない

からこそ、物語になるのだと私は思い知らされた。婚活という現場で行われていたのは、それとは真逆の光景だったからだ。「離婚歴あり」というチェックボックスに一つチェックを入れるだけで、異性からの返信確率は格段に下がる。公務員や上場企業の社員だというだけで婚活という場ではヒーローである。私たちはみんな、血眼になって「失敗しない相手」「楽できそうな相手」を探しているわけで、こんなに可笑しいことはなかった。

彼女と出会ったのは、婚活を初めて2年ほど経った後、マッチドットコム上で出会った。サイト上で彼女を見つけた時に直感的に彼女にはメールを送るべきだ、と思った人。私と音楽の趣味が似ていたので音楽や夏フェスの話で盛り上がり、二週間ほどメールのやり取りをした後で、実際に会ってみる事に。秋の名古屋駅で待ち合わせる。移動した居酒屋で、初対面の彼女がiphoneで見せたのは女友達と行ってきたという安井金比羅宮の写真だった。史上最強の怨霊として恐れられた崇徳天皇を祀ったこの寺、縁切り・縁結び寺として有名だそうで、境内には「〇〇勤務の〇〇と〇〇が分かりますように」、「夫が〇〇との不倫をやめますように」なんていうすごい内容の絵馬が盛りだくさん。もちろん全て実名である。それを写真を肴に酒を飲む我々。「birdとみうらじゅんの不倫結婚の是非」「出会い系で会ったウザい相手」の話で盛り上がる。で、何時間かそんな話ばっかした後でシメにラーメン食って記憶飛ばして解散。婚活における「面接（実際に二人で顔を合わせることを指す婚活用語）」といえはそれはそれはシビアなものだったはずだ。最初の「面接」でこんな事話してていいのかよ、という気もするがやっちゃったもんは仕方がない。それにしても、岐阜でネットの事や音楽の事を一緒に話せる相手というのは本当に貴重だった。で、何度か会ってしょうもない事を話しているうちに、そのまま付き合う事に。婚活サイトに登録している以上、「付き合いたい」というのはとりあえず前提なので余計なかけ引きもクソもなく、行くなら行く、いかないならいかないと線引きが明確にできるところがメリットである。ただし、恋愛してるぞ、という感じは薄い。どちらかというと一緒に戦う戦友のような感じ。ただ、一緒にいると、話が合って、楽。相変わらず『モテキ』映画版と一緒に見に行き帰りに居酒屋でボロカスに言ったりしている。あと、一番嬉しいのは、自分の書いたミニコミや原稿（そう、この原稿の事だ）を「バカだ」とか言いながら笑って読んでくれる事。彼女と話した事がヒントとなってその後、原稿になる事もあったりする。そういう関係は、一般的な恋愛関係とは少し違うかもしれないけれど、楽しい。思えば不思議な縁である。自分は恋愛、というものにそれほど興味があるわけではない。だが、私が婚活に強く望んだこと、それは人生を共に歩む戦友を見つけることだった。縁切り寺の絵馬について語ることが戦友になるのかどうかかわからないが、生きる事にまつわるめんどくささを一緒に引き受けてくれる人に幸いにも出会えたのならこれに勝る幸せはない。

こうして、たまたま自分は戦友にめぐり合うことができた（会う人ごとに運が良かったといわれる）。だが、不思議なのは、婚活は誰もが成功するはずはない。それはわかった。だが、そうした婚活の現状をほっておいている婚活会社やその周りにいるライターの人たちだ。例えば、どの婚活会社がどんな料金体系で、どんな人たちが登録しているのか？どの地方に強くて、カップル率はどれぐらいなのか。そういったことを調べて、情報を公開している婚活会社や婚活ライタ

一がどれぐらいいるのだろうか。その代わりに垂れ流されるのは精神論や自己啓発の類い、もしくは「ぼく、わたしが結婚できるかどうか」とは全く関係のない天下国家の話である。婚活が、我々の人生を使った一種のゲームだとして、そのゲームの攻略情報が全くないのだ。そんな中でゲームを攻略しろと言われても困るのは当然だ。そもそも、婚活は一度きりという原則がある。離婚でもしない限り、何度も婚活する人はあまりいないのだ。だからこそ、情報は蓄積されないし、すぐに陳腐化する。だからこそ、精神論によらない、正しい意味での婚活攻略本を作ろう。これがこの本の出発点である。

ちなみに、縁切り寺に行った彼女の友達は、もれなくその後結婚したそう。ものすごい効果である。良縁を求める人は是非一度言ってみる事をお勧めしたい。

突然ですが

あなたは、「歩くATM」という言葉の意味を知っているだろうか。

「歩くATM」とはお金持ちの男性の事である。これは、サイト「Pouch」(ポーチ)の記事「「歩くATM」から効率よく現金を引き出す5つのステップ/婚活クソババアにならないよう正直に生きる」内にて「アンドロメダ銀子」氏が提唱した概念である。では、「オムライス女子」は？「オムライス女子」とは同じく「Pouch」のライター、「エビオス嬢」氏が「モテる女子力を磨くための4つの心得「オムライスを食べられない女をアピールせよ」等」で提唱した「レストランではオムライスを食べられない女をアピールせよ」というアドバイスによる。どうでもいいけど、男をATM呼ばわりとかオムライスが食える女子がモテるとかあまりにひどすぎやしないかと憤激するあなた。世の中は広い。この世には、人知れず生み出された「恋愛パスワード」がまだまだあるのだ。本稿では、そんな恋愛パスワードの世界をご案内しよう。

恋愛バズワードとは

読んで字のごとく「恋愛・結婚に関するバズワード」のことであるが、あまたあるバズワードの中で最も成功したのは、白河桃子と山田昌弘が提唱した「婚活」である。説明するまでもなく「結婚活動」を示すこの言葉。元々、雑誌『AERA』（二〇〇七年十一月五日号）「結婚したいなら”婚活”のススメ」に登場した言葉だが、新書『婚活時代』（二〇〇八年、ディスカヴァー・トゥエンティワン）を経て見事に定着。今では一般名詞として使われている。だが、同時期に登場した数々の恋愛バズワードも同様に、定着しているわけではない。同時期にメジャーになった言葉に「草食系男子」がある。これは、元々二〇〇六年にコラムニストの深澤真紀が命名した「異性にガツガツしない男性」の事だが、これも森岡正博が二〇〇八年に『草食系男子の恋愛学』（メディアファクトリー）を書くなどして、一気にメジャー化した。

だが、あなたはほぼ同時期に提唱された「お嬢マン」をご存じだろうか。「お嬢マン」とはマーケティングライターの牛窪恵が提唱した「女性的な趣味をもつ男性」のこと。草食系男子と意味はほとんど同じなのだが、「草食系男子」が意味を書きかえられながらも一般名詞として通用しているのに比べると、こちらはどうにも影が薄い。というか、googleで検索してみるとわかるが、ほとんど死語化している。牛窪恵は「お嬢マン」のおかげで「草食系男子の名付け親の1人」として認知されるようになったものの、この落差は結構物悲しいものがある。

草食系男子とお嬢マン。この対称的な二つの言葉の差はどうしてできたのだろうか。

私見だが、草食系には「男子」がついていたからではないだろうか。要するに、我々は「男子」や「女子（ないしガール）」に慣れ親しんでいるのだ。改めて考えてみると二〇〇〇年代の中盤から、男を「〇〇男子」女を「〇〇女子（もしくはガール）」と呼ぶことはメディアの常となった。例えば、二〇〇五年には「メガネ男子」を集めたムック本『メガネ男子』（アスペクト）が発行。「〇〇男子（女子）」の先駆けとなる。「森ガール」は、mixiコミュニティが設立されたのは二〇〇六年で、ファッション誌『spoon.』の別冊『森ガール A to Z』が発行されたのが二〇〇九年。歴女も出現したのは二〇〇八年前後。その他、弁当男子に山ガール……と「〇〇男子」は枚挙にいとまがない。「女性的な趣味を持つ男性」は「マン」ではなく「男子」でなければならなかったのだ。

そして、「ポスト草食系男子」を狙って数々のバズワードが作られる事になる。

「ロールキャベツ男子」は「一見、草食系男子だけど、中身は肉食系男子である男性」のこと。一方「アスパラベーコン巻男子」は一見肉食系男子であるが、実は淡泊な草食系男子である男性のこと。「アホか！」と投げ捨てたいところだが、まだまだある。「魚食系男子」は「草食でも肉食でもない男子（それって普通の人ってことじゃないのか？）」、「食虫植物男子」は「女性に積極的にアプローチせず、相手が向かってくるのを待つ男子」、「絶食系男子」は「恋愛に興味を示さず、女性無しで人生を楽しめるタイプの男子」のこと。中でもサイト「Pouch」はその数たるやふるっている。大人女子、多忙女子、芝生男子、ドリル男子、拳句の果てにはプレデター女子まで……。二〇一〇年代も二年が過ぎ、挙げきれないほどの「〇〇男子（女子）」が登場することとなった。しかも、そのどれもがイマイチな定着ぶり。「Pouch」が典型的なのだが、「そんなこと言ってるのはマドモアゼル銀子とエビオス嬢だけだろ」という「そのサイト（さらにいえば、記事1個のみ）でしか見かけない「〇〇男子（女子）」」が大量に発生しているのだ。

ではなぜ、このような「〇〇男子（女子）」が大量生産（+大量廃棄）されることになったのだろうか。

「恋愛バズワード」の歴史を振り返るに、「婚活」や「草食系男子」は社会学者やマーケティング、ジャーナリストといった人たちが、主に雑誌、もしくは出版社が運営するサイトで論じられてきたものだった（そして、それらの多くは書籍化される事が前提とされてきた）。また、「メガネ男子」や「森ガール」はもともと、mixi内のコミュニティがその発祥で自然発生的に盛り上がったものだが、両者とも書籍や雑誌に取り上げられるタイミングでメジャーになったのは同様であり、これらはメディア（とりわけ出版社）の存在が前提とされてきた。サイトに掲載したバズワードがヒットし、書籍化されてメジャーとなる。この一連のサイクルのビジネスモデルはこれまでの出版社のビジネスモデルを越えたものではない。そして、ここには当然、その語句がそれなりに妥当性があり、書籍なりコラムなりが納得できるものであることが必要になる。

一方で最近登場した「〇〇男子（女子）」達は似ているようで全く違う。「魚食系男子」はサイト「nanapi」の「肉食系はもう古い?! 魚食系男子の特徴と攻略法」が初出、「食虫植物系男子」はサイト「OKGuide」内の記事「?系男子の新しい傾向を知る方法」、そして「Pouch」に登場する数々の男子・女子は言うに及ばずである。現在の「〇〇男子（女子）」はメジャー化を前提としないバズワードなのだ。その語句が現実を反映しているかとか、原稿やリサーチの質は関係なく、その言葉がバズってサイトのアクセスが伸びることが目的なのだ。この「バズ」は必ずしもまっとうな反応である必要はない。プラスの反応だろうがマイナスの反応だろうが、とにかく反応があり、ツイッターやフェイスブックのような導線を通じてアクセス数を稼ぐことができればいいのだ。そして、「バズ」が起こった時点で言葉としての役目は終わっている。つまり、「歩くATM」や「オムライス女子」は出オチなのだ。

「儲かるネットメディア」としての恋愛バズワード

ツイッターの著名ユーザーである「岡田ぱみゅぱみゅ」氏は「ロケットニュース24」や「G I G A Z I N」に代表されるネットメディア・ニュースサイトについて、「[ネットメディアの経営だけ考えれば「低コストの後追い取材を、足を使わずに」が最強](#)」だとツイートしている（詳細発言はトゥギャッター「[儲かるネットメディアの作り方](#)」を参照。）。これは「ロケットニュース」などが得意としている「有名アカウントの〇〇のtwitterが炎上」とか「xxと新聞で報じられており、ネットでは△△という反応がある」式の記事の事を揶揄した発言だが、この「最強」の法則を忠実に実行しているのが「Pouch」や「nanapi」に登場する「〇〇男子」「〇〇女子」ではないか。もともと、恋愛というのは誰でも発言できる、敷居の極めて低いテーマである。IT系やマネー関係のように専門的な知識も必要ない。しかも、「魚食系男子」や「オムライス女子」が本当にいるのか、などと検証するような人間はよほどの暇人であり、ほとんどの人はその内容の真偽を確認しない。これは、つまり「内容はどうでもいい」「どれだけしょうもない内容でも（場合によっては嘘でも）いい」という事になる。これはネットメディアの「ネタ」としては最強だ。今の世の中、「ロケットニュース24」や「G I G A Z I N」の「後追いジャーナリズム」を批判するのは、ネットのリテラシーの高い人たちにとっては当たり前になりつつある。だが、その意味で「Pouch」などが展開する「〇〇女子論」は最強の後追いジャーナリズムなのだ。で、実際、それが金を生んでいる以上、こうしたタイプの恋愛バズワードがなくなることはないだろう。それを読ませられる方からしてみたらたまったものではないが。

本誌収録内容の一部（「あ行」、「か行」を公開）

あ行

・足切り（あしきり）【出会い・別れ】

相手のスペックを見て「無し」を判断すること。就活でいう書類選考落ち。こちらから連絡するかどうかの視点においては「自分のスペックでは足切りされる可能性が高い」も足切りの観点になるため、極端なハイスぺ男女が一番人気になるとは限らない。（池田仮名）

・アスパラベーコン巻男子（あすぱらベーこんまきだんし）【男子・女子】

一見肉食系男子であるが、実は淡泊な草食系男子である男性のこと。つまり、ロールキャベツ系男子の逆。その出自は『ヒルナンデス!』とも『ホンマでっか!?TV』とも言われているが、全く定着していないため不明。（痴女愛好会名誉会長）

PV稼ぎの一環。（黒河大河）

・アラサー（アラサー）【世代】

「アラウンド・サーティ」の略。狭義では二七歳以上三三歳以下の男女。二五歳以上三四歳以下を含める場合もある。婚活市場の主成分となっている。特に女子は三五歳以上になると子供を産む事が難しくなってくるため、アラサーと呼ばれるうちに勝負を決めたい。（池田仮名）

三四歳はアラサーに含まれるってばさ。（黒河大河）

・アラフワ（あらふわ）【世代】

「アラウンド・不惑」の略。論語の「男子四十にして迷わず」より。一般的には「アラフォー」と呼ばれる三五歳から四四歳の婚活男子のこと。彼らに怖いものはないので不相応に若い女子達に向かって定型文を爆撃したり、オフ会などに出てきてワンチャンを狙っていたりする。「自分の子供」を非常に欲しがる傾向にあり、故に三四歳以下の未婚女子を狙うという高難度設定を自らに課す。離婚済み物件も多く、男子四十にして惑わされまくり。

（池田仮名）・・・（黒河大河）

・いいぜ、てめえが何でも思い通りに出来るってなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す。（いいぜ、てめえがなんでもおもいどおりにできるってなら、まずはそのふざけたげんそうをぶちこるす）【婚活全般】

『とある魔術の禁書目録』の登場人物である上条サンの能力「幻想殺し（イマジンプレーカー）」の前口上から。若い頃の「普通の出会い」ではそれなりにモテた経験がある男女

達であっても婚活で最初から成果を出すのは難しく、婚活を始めた頃に抱きがちな「ふざけた幻想」は大抵ぶち殺されてしまう。手痛い「幻想殺し」を受けて婚活鬱になることもあるが、それもまた通過儀礼である。（池田仮名）

お見合いパーティーの参加者は飢えてるはずだから入れ食いできるでしょ。そんなふざけた幻想を抱いていた時期が私にもありました・・・。（黒河大河）

・生き甲斐搾取（いきがいさくしゅ）【婚活全般】

ワナビー産業やベンチャー企業などに類するブラック企業には「やりがい」があるために、過剰労働かつ低待遇でも辞めにくいといった構造があり、「やりがい搾取」と言われている。同様に家族の問題はそれが不条理なものであっても「生き甲斐」を感じやすいため、過剰労働かつ低待遇どころか、むしろ給与を支払う構造となるため、これを「生き甲斐搾取」と呼ぶ。家族の大半は選択不能であるが、配偶者は有無を含めて選択可能であるが。大抵の男子は妻や子供の扶養、持ち家、車などを視野に入れた「生き甲斐」を求めるために「ATM（→生む機械・ATM）」を求める女子との奇妙な共犯関係が成立する。（池田仮名）

歳を取ってくると、仕事や趣味だけでは好奇心や生きるための意志が不足してくるので、生き甲斐が必要になってくるのです。（黒河大河）

・イクメン（いくめん）【男子・女子】

育児を積極的に楽しんで行う男性のこと。これまで働く女性が妊娠した場合において自身の産休を経て、長期の育児休業や退職をすることで育児を行う事が一般的であったが、男性が育児休業基本給付金制度などを用いて育児休暇を取ったり、在宅勤務をしながら育児を積極的に行う場合などに呼称される。働く女性にとって、結婚のハードルを下げる方法のひとつとして歓迎されるが、一般的な企業ではまだまだ難しい現状があり、制度の充実や新しい規範の浸透などが求められる。二〇一〇年のユーキャン新語・流行語大賞にてトップテンとなった。（池田仮名）

働くアラサー女子にとっては男子がイクメンになれるか否かも重要なスペックとなりうる。（黒河大河）

・イケダン（いけだん）【男子・女子】

「イケてる旦那様」の略称。「仕事もしっかりするが家事や家族サービスも忘れない」という理想の男性像。光文社『Very』の連載記事「今月のイケダン見つけた」が発祥。「仕事もバリバリこなすが家事にも協力的」というそのパーフェクト超人なみのスペック要求はある意味、古の「三高」よりもタチが悪い。なお、『Very』に登場する「イケダン」はほとんどが一部上場のメーカー、商社など超一流企業に勤務する男性で、その暗黙の了解に想いを馳せざるを得ない。（republic1963）

ビッグダディだって立派なイケダンだろ！（痴女愛好会名誉会長）

・魚食系男子（うおしょくけいだんし）【男子・女子】

肉食系でもなく草食系でもない男性の事。草食系のように消極的なわけでも、肉食系のように積極的なわけでもない、という人々。二〇一一年ごろからニュースサイトを中心に度々取り上げられている。「そんな人ホントにいるのか？」というツッコミをしてはいけない。

(republic1963)

さかなクンの事。（黒河大河）

・産む機械・ATM（うむきかい・えーていえむ）【婚活全般】

女性が子供を産む機械なら、男性はお金を産む機械。人格よりも機械としてのスペックを重要視して結婚を行う事が本当に幸せなのかについてはお互いにジレンマがある。（黒河大河）

・エスポワール号（えすぽわーるごう）【お見合いパーティー】

婚活における搾取目的のクズサービスの事を指す。地方開催や、運営会社の搾取目的、参加メンバー、その他もろもろの事情によって、一部には会場に足を踏み入れた瞬間、参加を後悔したくなるようなお見合いパーティーも存在する。そのようなお見合いパーティーは経費を極力浮かせるために、ホテルの会議室、長机にパイプ椅子の殺風景な会場、ドリンクは紙コップのウーロン茶、もしくはドリンクなしで行われることが多く、そのあまりの惨状と絶望感を『賭博黙示録カイジ』に登場する「エスポワール号」になぞらえたことが語源。一部の劣悪婚活サービスでは、エスポワール号状態がデフォルトになっているサービスもあり、注意が必要。エスポワールはフランス語で「希望」の意味だが、エスポワール号に乗り込んでしまったが最後、我々は絶望的な戦いを強いられることになる。（republic1963）

そんなマゾゲーも嫌いじゃないぜ。（黒河大河）

・FO(えふおー)【出会い・別れ】

「フェード(F)アウト(O)」の略。ある程度やりとりのあった相手に対して徐々に連絡を断つ／断たれること。お誘いメールに返信がないことからお察してください。プロレスではチョークスリーパーがキマった状態でレフリーに腕を上げられて反応がない状態を三回繰り返すと「落ちた」と判断されるが、同様に三回連続で反応がなければ「落ちた（脈がない）」と判断すべき。（池田仮名）

返事がない、ただのしかばねのようだ。（黒河大河）

・NTR（えぬていーあーる）【モテ・非モテ】

「寝(N)取(T)ら(R)れ」の略。婚活においては互いに並行して同時期に別の異性とも会っている事が一般的であり、数回会った程度ではまだまだ乗り換えの危険性に晒されている。実際に付き合うまでに至ってなくても、「他に好きな人ができて・・・」とメールが来れば一端のNTR体験をした気分になるため、NTR属性がある人にとっては天国と言えなくもない。（

池田仮名)

FO (→FO) されてから数週間経ってNTR報告が来るとしばらく凹む。(黒河大河)

・お祈り (おいのり) 【ネット婚活】

就活におけるお断りの定型文「～の幸せをお祈りいたします」から。初回メールから足切り (→足切り) されて定形お断り文を送りつけられる「開幕お祈り」を食らうと少し凹む。しばらく待って返事がないなら察せという「サイレントお祈り」もある。それなりの写真を公開している女子は日に10通以上のメールがくるため味気ないお祈りをしがちである。(池田仮名)

お祈りをしてくれるだけ誠実という話はある。(黒河大河)

・お嬢マン (おじょうまん) 【男子・女子】

「男性だけど、女性的な趣味 (化粧やファッション、スイーツなど) に興味があったり、女性的な特徴 (アルコールを飲まないなど) を持っていたりする若者」の事。マーケティングライターの牛窪恵が『草食系男子「お嬢マン」が日本を変える』(講談社現代新書) にまとめた。要は草食系男子の別定義なのだが、草食系男子に比べるとイマイチ定着度は低い。

(republic1963) (類義語: 草食系男子)

・オタク婚活 (おたくこんかつ) 【オタク婚活】

自身がオタクである場合に、互いの趣味に理解があるオタク同士で結婚できたら幸せ。またはカップルになりやすいという発想でする婚活。オタ限定のお見合いパーティー形式やSNSコミュニティなどが一般的。近年では「オタク男子は扱いやすくて意外に金持ち」「オタク女子は黒髪清楚でウブ」などといった幻想に囚われた一般男女の参戦も見受けられる (→タナカ系女子) エロゲ・百合・ロリ・ハーレムなどのジャンルは、オタク婚活でもそれを言い始めるとドン引きされやすい。特にエロゲ評論の高尚さについて語られると非常に恥ずかしいものであるが、近年では「俺妹」「はがない」などのラノベを中心にエロゲ趣味を公言する「残念系女子」が台頭する事によって、お互いにこじらせる状況ともなっている。オタク婚活はオタク度の高さを競うものではなく、あくまで異性としてOKと思う範囲内でのオタク気質をもった普通の人同士での出会いをするためのものである。故にフリータイムはガンダムの素晴らしさを布教する時間でない事ぐらいは認識しておくべき。(池田仮名)

フリータイムにおいて複数人で話す事になった際に、ドン引きレベルのオタトークを展開して周囲を巻き込んで自爆する行為は「メガンテ」と呼ばれて忌み嫌われるが、お前らの性格的に仕方ないところもある。(黒河大河)

か行

・回転寿司（かいてんずし）【お見合いパーティー】

お見合いパーティーの開始時に数分間ずつで席を移動しながら異性の参加者全員と自己紹介していくシステム。女子にとっては男子が一席ずつ動いて挨拶してくるため、まさにベルトコンベアーで寿司皿がどんどん流れてくる見立てとなる。たいして美味くもない寿司を三〇皿も五〇皿も試食させられれば誰だってぞんざいになってくるため、中盤辺りの記憶が途切れている事も多い。同じような話を毎回されるのは辟易とするため、ここで記憶に残るような何かがあるかというのが勝敗の分かれ目。（池田仮名）

女子がベルトコンベアーで回ってくるAVがあった気がする。（黒河大河）

・ガチ恋系オタク婚活（がちこいけいおたこかつ）【オタク婚活】

二次元の存在や声優・アイドル等に本気で恋をしているオタクがする婚活のこと。恋愛に期待するトキメキは仮想現実によって十二分に満たされているため、結婚はあくまで社会的地位や生活のためと割り切っている。結婚に夢見がちでないからすんなり決まるし、リアルな浮気もしにくいため、実は婚活勝者になりやすい・・・すみません嘘つきました。（池田仮名）

俺の嫁は一三週間ごとに変わる問題。（黒河大河）

・カップル成立（かっぶるせいりつ）【婚活全般】

読んで字のごとく、カップルが成立すること。主にお見合いパーティーで使われ、ネット婚活などでは使用されない（即面接に入るため）。ただし、婚活用語における「カップル成立」とは一般的な用法とは異なるので注意が必要。婚活用語における「カップル成立」とは、一般的な用法における「カップル成立＝男女が付き合う事」という意味ではなく、「男女が連絡先を交換し合う事」「（主にお見合いパーティーにおいて）勝ち組として会場を出ること」を意味している。通常はカップル成立後、面接を経て、晴れて付き合う（真のカップル成立）という流れをとる。つまり、婚活におけるカップル成立とは、面接以前の「会社説明会の予約」「エントリーシートでの選考」のようなものであり、このような用法の混乱は勘違いを誘発するため注意が必要。（類義語：カプる）（republic1963）

はじめてカップル成立した時は結婚式で誰を呼ぶかまで妄想したものじゃ。（黒河大河）

・カフェ俺様（かふえおれさま）【男子・女子】

二〇一二年、天下の電通が四五〇〇人近い男性を調査した結果導き出された新たな二〇代男子像。「女性的な趣味や外見へのこだわりを持つ半面、女性への接し方や自己向上意欲において『オレ様』的な男らしさを持つ」人たちのこと。美容や健康に気を使うが、女性に対しては「俺様キャラ」で接し、出世・消費にも意欲的。繰り返すが「そんな人ホントにいる

のか？」とツッコンではいけない。(republic1963)

『笑点』で三遊亭好楽が使ったネタ。(黒河大河)

・業者(ぎょうしゃ)【ネット婚活】

ネット婚活サイトに徘徊する、他の出会い系サイトや悪質サービスの運営者のアカウントの事。

やたらと写真映りもしくは顔が良い

「恋愛対象二〇～四五歳」など質問事項への回答が適当(幅広いともいう)

数回やり取りすると、いろんな理由をつけて他サイトに誘導してくる

女性アカウントでも積極的に連絡してくる

といった特徴を持つ。サイトに登録したばかりで、婚活に対するリテラシーが低い状況だと、「こんなカワイイ(カッコいい)人から連絡が！」となりがちで、喜び勇んでアクセスすると、絶望のふちに突き落とされる。(republic1963)

・子梨(こなし)【ネット婚活】

子供がいないこと。または子持ちの異性を対象外とすること。婚活サイトには離婚済み物件も多く登録しており、既に子供が居ることも珍しくない。そのような希望がない場合は検索条件から除外したり、希望条件で「子供なし」を明確化しておく必要がある。スペックが明示化される婚活市場においては子供の有無が棲み分けの第一条件となる場合が多く、同居の子供が居ながら初婚の相手を狙うのは至難の業である。(池田仮名)

他人の子供を自分には背負えないです。ごめんなさい。(黒河大河)(対義語:子蟻(こあり))

・婚活鬱(こんかつうつ)【婚活全般】

婚活を続けていくと自己評価と市場評価のギャップを必要以上に実感する・出会いと別れを短期間で繰り返す・最初から愛情を抱いたわけでもない相手に対して生活を侵犯される恐怖を感じるといった事が続いて憂鬱になりがちである。婚活はお互いに幻想を維持したまま突っ走れる「普通の出会い」とは異なる事を認識して、自身の心を守ることも必要になってくる。婚活鬱になっているときに「普通の出会い」をすると神からの救いに見えるため、広義の婚活に繋げるために狭義の婚活をして取返して婚活鬱になるというアプローチもありえる。(池田仮名)

つらばよになることを含めて婚活。(黒河大河)

曰く『頭でっかち』、曰く『論理的な馬鹿』、曰く『ハリボテ』。これが僕がこの本に対して感じたことだ。思考法としては斬新極まりないし、日本には少ないタイプのユニークな考え方であろう。ただし、それらはあくまで「読者を焚きつける」意味合いで合って、それ以上の論理性、社会に通用するリアリティを期待して読むとイライラさせられる。「論理的であることの限界」を見せられた本であり、近代が生み出した反面教師であろう。

ロジカルである事、理屈が合うことが良いこととされている風潮に反して「理論的には正しいのに納得できない」という著作や話の存在があるのは僕だけだろうか。それが僕がこの本に感じることだ。

筆者が意図する「焚きつけるための超訳」にハマっているこそ起こる感覚だが、大真面目に経済学で反論すると「効用最大化」という視点では素晴らしいリバタリアンも「外部不経済」的視点や「人間が感情で動く生き物であり、人の感情が受け入れられないことがある」という人間の構造を受け入れていない。

そもそも、経済学とは社会の骨組みを扱う学問である。それゆえの全能感、理論上正しい政策論議を導き出すことができるのだが、結局は骨には神経や肉がつかないと社会システムとして成立しない。リバタリアンという連中はまさに「骨だけ骸骨」である。経済学上は正しい事を言っているが、それとて一面的なモノ。ましてや他の学問まで領域が及んでいないため、それをそのまま社会に取り入れればカオス以外の何者でも無くなる。

だが、筋が通らず、納得できない事をわざとやるからこそ気づかされたことが多い著作でもあった。特に超訳の仕方が非常に現代的な、高学歴社会的な「知性や知識を消費させる」態度であることが非常に面白かった。時代に必要とされた、訳者のセンスがいい意味でも悪い意味でも強く発揮された著作であった

(TM2501)

本書は、「リバタリアニズム」の解説書である。「リバタリアニズム」とは経済的、個人的な「自由」を最優先する政治的イデオロギーで、本書は一般的には不道德とされている存在、例えばポン引き、売春婦、2ちゃんねるの住民といった人々を、あえて暴論ともとれるリバタリアニズムのロジックで弁護する。本書のよって立つ、「不道德」擁護のためのロジックは極めて明快だ。それは、「自由」は絶対であるであるというドグマである。このドグマの恐ろしいところは、「自由」が大切だという事は近代を生きる誰もが認める事であり、「自由」を否定することは、すなわち近代を否定する事に他ならない事だ。どれだけ、右翼だろうが左翼だろうが、この世界に生きるほとんどの人は「自由に生きることはとりあえず好ましいことだ」とは考えており、それを否定する人は独裁国家に行くしかない。どんな人間だって、表だって「自由」を全否定することはできないはずで、彼らは「自由」を認める程度や前提条件について言い争っているに過ぎない。

つまり、「自由が大切だ」というリバタリアニズムを真正面から否定することは近代を否定する

ことになる。それがリバタリアニズムの主張の強固なところだ。

本書がネット界隈に1ダース50セントで掃いて捨てるほどいる「なんちゃってリバタリアン」と決定的に違うのは、その徹頭徹尾原理主義的な主張による。リバタリアニズムは一切の妥協をしないのだ。自由が大切だからこそ、それよりも上位の判断基準を置くことを絶対に許さない。これはある意味、リバタリアニズムの支持者達に相当な覚悟と能力を強いる事になる。国家による社会保障を全廃したとして、自分が失業してしまったらタダのアホなんだから。だからこそ、リバタリアニズムが政治的に多数派を形成することは、多分あり得ない。

リバタリアニズムに賛同するかどうかはさておき、その原理主義的主張を確認しておく必要はある。イケダハヤトのなんちゃってノマド論なんかにはうっかり感化されてしまうあなたのリハビリのためにオススメな一冊。

(republic1963)

第一回：パンイチ

■「サークル選びに失敗した大学生」

REPUBLIC 1963 (R) : そもそも、パンイチさんはなんでクリルタイ界隈にいるの？

パンイチ (P) : 僕、どの界隈でも必ず言われるんですよ。「なんでお前いるの」って。絵描きクラスタとか、コミケでも。で、それからPTSDで行けなくなるっていう(笑)。

Masao (M) : これでクリルタイ界隈にも来れなくなった。残念だ(笑)。

R : どういうきっかけで関わったの？っていうことが聞きたいんだけど。

P : きっかけは私の友人でキールさんという人がいるんですが、キールさんに「お前みたいなのがいっぱい来てる」って言われてオフ会に連れて行かれたのがきっかけです。そのオフ会はカルコミュートークっていうオフ会だったんですが、なんか誘われて行ったら参加者全員彼女がいたっていう。それからキールさんに色々オフ会やイベントに連れていかれて、いつの間にやら非モテ界隈に漂着しました。

R : キールさんとはリアルの友達だったんですか？

P : もともと、mixi上の友達だったんですが、mixi日記で色々ぼやいてたら仲良くなりました。

R : つまり、キールさんが「兄」だったって事だよね。あなたを導いた。

P : そういうことです。クリルタイ界隈に顔を出すようになったのは結構後のほうだと思います。

R : パンイチさんは元々何をやってたの？

P : 引きこもりです。当時大学生だったんですが、大学にもほとんど行かず、家に引きこもってネットラジオとサブカル論壇誌を読んで過ごしていました。もともと、大学の軽音楽サークルに入っていたんですが、3カ月でやめちゃいました。そうしたら途端に「サークル選びに失敗した大学生」みたいな大学生ライフに。

M : 辞めて別のサークルいけよ(笑)。

R : なんか、プラネットの人間観察に出てきそうなキャラだよね。

P : 典型的な「〇〇くん」みたいな感じです。

R : 大学に入って、軽音サークル入って、3カ月で音楽性の違いで脱退と。そのあとはどうしたの？

P : ネットラジオですね。『もてラジ』とかが好きなんですけど、大学の時、ぼっちなんで何にもすることがなく、ラジオを聴いていたんです。そうするとぼっちなのに友達がいるみたいな感じになるんです。どこにも居場所がなかったんですが、部室で友達といるような感じになりました。

R : なるほど。俺らの頃はAMラジオだったね。AMラジオをコンポでMDに録音して。『深夜の馬鹿力』だけを1週間ずーっと聴いてて、それだけが心の支えだった時期があります。

P : 自分らはMP3で聴いてました。

M : 俺の居場所はゲーセンだったよ。

P：だから、サブカル思想界隈に興味を持ったのは引きこもり時代の後半の方ですね。

R：じゃあ、最近のサブカル論壇についてはどう思っている？

P：最近は全然追ってないですけど。何が流行ってるんですか。

R：プラネッツだよ。

P：プラネッツとか、サブカル論壇ってオワコン化してるじゃないですか。

R：俺はそんなこと怖くて言えないよ(笑)。なんでオワコン化してるの？

P：震災とかあって、彼らが言ってることがアホらしくなったっていうのはあるんですが、それ以上に普通に飽きたんですよ。それはだれかが悪いわけではなくて、サブカルをやってられるのは二〇代までなんですよ。

R：パンイチさんいくつなの？

P：29です。

R：もうそんなになるのか。

P：そうなんですよ。30過ぎると熱意が無くなったというか。ロックンロールとかあるわけじゃないですか。熱いメッセージを送ってくるんですけど、だんだんそういうアツさがつらくなってくるといいますか。もっと普通にしたいといふか。ジャズとかクラシックとか、そういうメッセージ性のないものにシフトしていきたいんです。

R：しかし、その不思議な感じはどこから来るのかね。

P：やっぱりそれは友達がいなくていいことですよ。自分の地元は新興住宅地で何もない文化不毛の地なんですけど、そういうところには、洋楽とか聴く人がいないじゃないですか。みんなビジュアル系、ビジュアル系、ビジュアル系で。

R：俺は学生時代のそういうものに思い入れが薄いんです。はてなとか音楽とか全て大学以降の趣味なので。

P：リパブリックさんは高校の時とかは何してたんですか？

R：俺はゲームしたり、『歴史群像』読んだり、ラジオの野球中継を聴いたりしてましたね。1年かけて中日ドラゴンズの全ゲームを追いかけてたりしてました。ゲームとか野球とか歴史とか、サブカルチャーの中でもさらに異性ウケが悪いジャンルを俺は劣位サブカルって言うてるんだけど。中学から大学にかけては劣位サブカルばかりを消費してましたよ。その頃、俺はロキノンジャパンとかモテ系だと思ってたから。

M：俺も若いころはそうだった。

R：でも実際ロキノンとか読むと、これ読んでるやつはモテねえなと。それがわかったのは大分後の話です。「この本を読んでる君達は選ばれた人間だ」とか「この本の内容を理解できる君は凄い」とか選民思想を煽る本って読むとモテなくなるよね。

M：一〇代とかそういうのをよく読むよね。『ゴーマニズム宣言』とか。

R：一〇代のころ、『脱正義論』とかよく読んでいたな。

P：でも、当時はそういう事を言うメディアってなかったからですね。

M：『脱正義論』は薬害エイズの運動に小林よしのりがコミットしていくけど、次第にそこから離れていくっていう話なんだよね。

R：そうです。薬害エイズで厚生省を謝罪させたんだけど、学生たちが運動を自己目的化させて……っていう。あの辺は凄い好きでした。今やAKBヲタの1人になってしまいましたけど……。

■ロキノン脳の恐怖！

R：っていうか、パンイチさんは、ロキノンとか好きでしょ。

P：好きですね。椎名林檎とか。

R：発想が典型的なロキノン脳だよな。一番好きなバンドは？

P：難しい事聞きますね……何が好きって言うか。

R：あんた、そういうのがロキノン脳なんだよ！別に恥ずかしがる必要ないだろ！

P：実は、以前、友達と一緒に「DENPA」っていうオタククラブイベントに行ったんですが、そこで「何が好きなんですか」って言われて、ものすごく考えてたら「もういい」と怒られてしまいました。僕、思想としては緩いっていうか、汚れた大人なんで。そこでモテる音楽とか言うて怒られるんですよ。僕が「モテるために音楽聞いている」とか言っていると嫌われる。

R：それは嫌われるだろ。俺、怒った人の気持ちがわかるわ。

M：真剣に音楽を聴いている人もいるわけだしね。

P：それは僕もそうなんですけど、ちょっと恥ずかしいんですよ。僕だってエレカシとか凄く好きなんですけど。そんなのって別にいいじゃんっていう(笑)。別に音楽が好きなんだから許してよっていう(笑)。おふざけしてもいいじゃんっていう。

R：なんか、何をするにも半笑いだよね。ロキノンは大学当時から買ってたの？

P：ロキノンは買ってたんですが、音楽が聞こえてこないんですよ。

R：なんかかっこいい！！！！

P：なってないんですよ。ロックがここに。

M：はははは！じゃあ、音楽が鳴ってる感じがするメディアってなに？

P：それはネットラジオですよ。当時は違法で音楽が鳴っていたりするわけですから。

M：はははははははは！！！！！！

R：あんた笑いすぎだよ(笑)。

■女性ボーカルを聴く男はカッコ悪い

R：じゃあ、パンイチさんが考えるモテる音楽ってなに？

P：モテる音楽はないっていう結論なんですけど、そのうえで言うと、レッチリとかですね。

R：なんかそのエクスキューズの付け方が君らしいよね。でもレッチリなの？

P：大学ではみんなレッチリ聞いてて、これがリア充の音楽かと。音楽クラスタの中のイケてる音楽ですね。

R：音楽クラスタのイケてる音楽ってなに？レディオヘッドとかじゃないの？

P：レディオヘッドは「ただし、イケメンに限る」なんです。イケメンが言ったら濡れてくるん

ですけど、僕が言っても暗いだけで「帰れ」と。だからリア充たちが騒いでるレッチリと一緒に乗るのがいい。

R：そんな聞き方されてもレッチリも浮かばれないと思うけど。じゃあ、逆に嫌いなミュージシャンはいる？

P：ラッドウィンプスとかYUKIとかですかね。おばさんは早く引退してほしい。

R：ほんと、全てのファンを敵に回すような事をよく平気で言えるよな。

M：今で俺を敵に回したけど(笑)、じゃあ、湘南の風とかは？

R：多分この人に言わせると眼中にないと思うよ。

P：『純恋歌』は凄いいい歌ですよ。彼女とケンカして外に出て行くんですけど、パチンコ屋で景品を持っていくんですが、パチンコ屋で負けた時の事を考えてないっていう。パチンコ屋で気持ちを落ち着けるとか意味がわからない。5万すったとか、負けたらどうすんだと思います。

R：湘南の風を聞いている人はそんなことまで気にしてないと思うけど。っていうか、その上から目線はなんなんだろうね。っていうか、パンイチさんは女性ボーカリストとか聞いたらだめな人でしょ。

P：はい。女性ボーカルを聴く男はカッコ悪いって思っています。フレネシとかは比較的好きなんです。でも、YUKIはオバサンだから早くやめてほしいっていう。

R：失礼な。

P：実はYUKIのPVを担当した野田凧も嫌いで、嫌いが惑星直列的に重なってしまった。

僕は、とにかくアートが嫌いなんです。スケベニンゲンみたいな。

R：はてなの話しはしまっちゃったよ(笑)。スケベニンゲン？

■突如始まる論壇時評

P：僕はスケベニンゲンの事が凄く好きなんですけど。

R：はあ。俺、スケベニンゲンの正体は君だと思ってたんだけど(笑)。

P：いえ、違います(笑)。スケベニンゲンは権威主義じゃないですか。美大美大っていうけど芸大って言わないあたりが、多分、スケベニンゲンはハックルさんと違って芸大出じゃないんだろうなと思うと萌えるんです。

R：許してやれよ。っていうか、そこまでスケベニンゲンについてリソースを割けるのが凄いいよね。

P：僕はスケベニンゲンのレコメンドで服を買っているの。

R：は？

P：スケベニンゲンのレコメンドでフレンチラコステとか着てるんです。

R：えっ、なんで？

P：スケベニンゲンは間違っただけとは言わないんです。権威主義だから。だから、よそいきの事をやるには凄く向いているんです。もっとも、「オタクどもはディティールを追及するけど、美術の世界では外すことが大事」とかいう彼の主張は、偉い人が言ったことをそのまま言ってるだ

けなんですけど。

R：だけど、スケベニンゲンの言う事聞いて服着てる人なんて、この世にあなた以外にいないと思うけど。それこそマサオさんとか知り合いがいるんだから脱オタを頼めばいい。

P：マサオさんの脱オタは金がかかるんですよ。スケベニンゲンのいいところは、どこでも買えることなんです。ラコステとか、確かにオヤジくさいんですが、言ったら僕ももうすぐ三〇代なんで、とりあえずはずしてないんですよ。自己主張よりも防御のために使っています。つっこまれたときに「いや、定番だから」っていう。

R：今ってさ、服買うのってマルイじゃないの？

M：今更マルイはないよ。今はセレクトショップ全盛だから。

P：ラコステはちょっと丈が長い感じがするんですが、本来タックインで着るべき服なので、そこをつっこまれると弱い。

M：って、理論武装できてないじゃん！

R：まあ、ラコステだからいいだろと

P：許してちょんまげですよ

R：おっさん化してるじゃねえか、それ(笑)。

R：とにかく凄いよね。

P：ほめてないでしょ。

R：ほめてないけど、そんな考え方の人がいないから(笑)。ともかく、今日はありがとうございました。